



Title	<真珠の歌>の平行記事
Author(s)	滝沢, 武人
Citation	基督教学, 6, 23-27
Issue Date	1971-07-12
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/46276">http://hdl.handle.net/2115/46276</a>
Type	article
File Information	6_23-27.pdf



[Instructions for use](#)

## 〈真珠の歌〉の平行記事

滝 沢 武 人

一、いわゆる〈真珠の歌〉は、新約聖書外典のトマス

行伝一〇八―一一三章に含まれている美しい物語、詩篇であり、トマス行伝の著者が、それ以前にすでに成立していた〈真珠の歌〉を、トマス行伝の中に収録したと一般に考えられている。その宗教史的位置に関しては、私はすでに論じてある（〈真珠の歌〉の宗教史的位置―G. Quispel 説をめぐって―、『日本の神学』九、一九七〇年、一五五―一六七頁）。私は、その際、〈真珠の歌〉が、A. F. J. Klifa と G. Quispel の主張するような、シリアのエンクラティス派的、正統的キリスト教に属するものではなく、やはり H. Jonas, G. Widengren, A. Adam, G. Bornkamm 等の如く、イランの前キリスト教的なグノーシス主義史料と

考えるべきであり、成立年代は少なくとも Adam が主張する A・D・五〇―七〇年までは、十分に遡りうるであろう、と記しておいた。以下の論述は、それを前提、継承して、この詩篇の宗教史的位置を確認するために、現在まで指摘されたすべての平行記事を、〈真珠の歌〉と比較検討しようとするものである。なお、ここで私は、「平行記事」という語を、宗教史的連関があると思われるもの、という程の広い意味に解して用いている。

二、先ず、〈真珠の歌〉成立以前の平行記事を検討する。Adam (*Die Psalmen des Thomas und das Perlenlied als Zeugnisse vorchristlicher Gnosis*, BZNW 24, 1959) が言及しているユダヤ教の Joseph と Asepath の説話、及び旧約聖書エステル書のエステルとマルドカイの物語とが、〈真珠の歌〉に直接的な影響を与えたと考えられない。それらユダヤ教の伝承よりも、むしろ Widengren が指摘したバルティアの叙事詩 Wis u Ramin が、〈真珠の歌〉と密接な連関を有していると思われる。そこには、〈真珠の歌〉と同じような「海」、「真珠」、「蛇」、「王子」などという一連の要素が含まれてい

るのでも、 (“Les origines du gnosticisme et l'histoire des religions” in: U. Bianchi (ed.), *Le origini dello gnosticismo*, 1967, p. 28-60)。

次に、前掲拙論において指摘しておいたように、インドに存在していた民間伝承も又、〈真珠の歌〉に影響を与えたと考えられる。つまり、梵文学において「毒気吹き上げ、頭拾げた蛇」の頭に宿り青光りする真珠、そして、仏典(『ジャータカ』)における「如意珠」を求めて海に入り、辛苦して竜王(蛇)の宮に到り、「如意珠」を受取る菩薩の物語が、〈真珠の歌〉の平行記事と考えられよう。

更に、W. E. Crum は、トマスの詩篇 (Thomaspsalmen) と〈真珠の歌〉との全体的な類似性を、「王子の冒険、彼が待ち望む輝く衣服、ユーフラテスを通つて彼の父の家、喜びの国への帰還」として指摘した (“Coptic *Analecta*”, *JTHS* 44, 1943, p. 181)。トマスの詩篇は、二十篇で構成されており、前半の第一〜十三篇は、神話論的に述べられており、エンクラティス派的な第十四〜二十篇よりも、より古い時代のものと考えられる。Adam

(*op. cit.*) のように、この詩篇の中に仮現説をも見出す見解に対しては反論も提出されているが、トマスの詩篇(の特に前半部分)が、前キリスト教的なグノーシス主義文書であり、内容的にも歴史的にも〈真珠の歌〉と密接な連関の中にあることは認められるであろう。Adam (*op. cit.*) は、第一篇を特に注目し、それを、「萌芽的グーシス主義の最初の文書」と呼び、B・C・二世紀の終り頃まで遡ると主張している。「父」に遣わされた「光の子」の戦いと救済の物語は、バルティアの神話論を素材としており、原典がアラム語と考えられることから、〈真珠の歌〉の精神的風土との共通性が支持されると思われる。トマスの詩篇、*Wis u Ramin* との連関から判断すると、〈真珠の歌〉の成立年代は、かなり早い時期にまで遡るのではないかと思われるが、確定できない。続いて、〈真珠の歌〉成立以後の平行記事を検討する。

III' A. Dillman がすでに、この以前に指摘したように (“Über die apokryphen Martyrergeschichten des *Cyriacus mit Julitta und des Georgius*”, in: *Sitzungsber. Berl. Akad. phil.-hist. Kl.*, 1887, S. 339 ff.)

キュリアコスの祈りが、〈真珠の歌〉の直接的な影響を受けていることは明らかであろう。この祈りの主題は、バビロンからのイスラエルの解放であり、主人公キュリアコスは、ユダヤ教のメシアを象徴している。バビロニア神話に求められる素材が、キュリアコスの祈りにおいてユダヤ教的に修正され、更に、後に、キリスト教的な修正、追加がなされたと思われる。追放され、孤立化したユダヤ教徒の間で、〈真珠の歌〉が救済の讃歌として親しまれていたであろう。

四、ソロモンの頌歌 (Salomo-Oden) の Ode 23 『天の手紙』の叙述が、〈真珠の歌〉の救済者たる「手紙」の平行記事とみなされる。そして、〈真珠の歌〉の手紙の叙述の方が、より素材であり、より古い時代に属すると考えられる。ソロモンの頌歌の著者は、〈真珠の歌〉の純粹にパルティア的な素材と叙述とを粉飾し、それに、キリスト教的要素を附加している(特に二二～二三節)のである。ソロモンの頌歌は、キリスト教的グノーシス主義に属するものであり、成立年代を、一応 Adam (*op. cit.*) のように A・D・一一〇～一五〇年と推定すると、〈真珠の歌〉

は、少なくとも、A・D・一世紀中には、すでに存在していたと考えられよう。〈真珠の歌〉には、キリスト教的要素が全く見出されないことから、比較的、早い時期にまで遡るのでないかと思われるが、確定はできない。

五、マンダ教文書は A・D・七～八世紀頃に編纂されたのだが、その一部分が、恐らく A・D・一世紀の後半にまで遡り得るであろうことが、最近の研究によって確認されている。R. Reitzenstein が指摘したように ("Iranische Erlösungsglaube", ZNW 20, 1921, S. 9) 『マンダ教のテキストは、トマス行伝の魂の歌(〈真珠の歌〉)を残りなく説明している』のである。しかしながら、マンダ教文書のどの部分が、より古い時代のものであるかが未決定であり、〈真珠の歌〉とマンダ教文書との宗教史的連関を厳密にたどることはできない。〈真珠の歌〉がマンダ教の初期段階を形成していた集団によって親しまれていたことは充分考えられ、Adam (*op. cit.*) は、その集団をイラン的な "naked" と想定している。〈真珠の歌〉の個々の平行記事は、マンダ教文書の中に数多く見出されるが、全体として、あるいは、まとまった断片としては

存在しない。それは、〈真珠の歌〉の叙事的・歴史的な文学形式が、マンダ教の極めて神話論的な叙述と直接的には結合しえなかったためであろう。

六、〈真珠の歌〉の宗教的見解は、マニ教の主要な理念と完全に一致しており、マニ教の教説によって〈真珠の歌〉のすべてが解明されると思われる。そのため、従来、多くの研究者が、〈真珠の歌〉がマニ教に属する文献であると考へ、W. Bousset は、〈真珠の歌〉の王子をマニ自身と断定した (“Manichäisches in den Thomasakten”, ZNW 18, 1917/18, S. 32)。しかしながら、Widengren の研究 (“Der iranische Hintergrund der Gnosis”, ZRGG 4, 1952, S. 97-114) によって、今日では、〈真珠の歌〉が、少なくともマニ以前にすでに成立していたことが、一般に認められている。しかし、マニ教文献における〈真珠の歌〉の直接的な伝承は、マンダ教文献におけるよりも、更に乏しい。それは、〈真珠の歌〉の高度な詩の形式が変形の企てを許さなかったためと、〈真珠の歌〉が、マニ教徒にすでに広く親しまれ、改めてマニ教文献に取り入れられたり、修正したりする必要

がなかったためと思われる。

七、最後に、A・D・四〇〇年頃に活動していた Enchiridion 運動の指導者、シリアの神秘主義者マカリウス (Makarios) が〈真珠の歌〉を知っており、平行記事が認められるであろう。このことは、すでに前掲拙論において論じてある。マカリウスは、〈真珠の歌〉の物語をキリスト教的に修正、解釈している。〈真珠の歌〉をキリスト教的に解釈することも可能ではあるが、やはり、グノーシス主義的に解釈する方がより説得力があり、自然である。

八、以上、〈真珠の歌〉の平行記事を検討した結果、次のことが明らかになったと思われる。まず、〈真珠の歌〉の成立に影響を及ぼしたのは、インド、イランに存在していた民間伝承である。〈真珠の歌〉の著者は、グノーシス主義の人間理解、世界理解に基づいて物語を構成、創作したのである。成立年代は、比較的早く、少なくとも、前キリスト教的史料である。〈真珠の歌〉は、グノーシス主義者にもちろんのこと、更に、キリスト教やユダヤ教の人々にも親しまれていたと思われ、多くの平

行記事が確認される。

〈真珠の歌〉(一般に、グノーシス主義)は、キリスト教とは無関係に成立したのである。グノーシス主義は、キリスト教と混淆しつつ、やがて「異端」とされていったのであり、決してキリスト教から墮落した単なる「分派」なのではない。

植木 幹雄

## 理知的直覚主義粗描

### 一、序

十八世紀イギリス倫理思想の主流は、理知的直覚主義者といわれる人々である。かれらは直覚主義の立場に立つて、人間は道徳的価値に関する直覚的意識をもつとするが、しかし道徳的価値判断を「仁愛」と「道徳感情」ではなく、「真理」と「理知」に依拠して形成しななければならないと主張する。

この学派の代表的思想家達を前後二期に区分するならば、カドワース、クラーク、バルギーは前期に、ブライスは後期に属する。今回は前期の思想家にのみ注目し、ブライスに関してはジジックとの関係であらためて問題にすることにする。

〔附記〕 〈真珠の歌〉のテキストの内容及びその解明については、拙論「グノーシス主義とハイデッガーの思惟」(日本宗教学会編『宗教研究』二〇七号、一九七一年六月)を参照されたい。